

浪江の

こころ通信

・第70号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム※が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第70号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





菅野千代子さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：1月24日

“被災を語り継ぐ”ことが私たちの努め



▲撮影した写真「だいこんシスターズ」と共に

震災前は、権現堂の自宅でガーデニングを楽しんでいた菅野さん。現在の住まいである那須塩原市には、平成26年12月に引っ越されました。広くなったお庭で花を咲かせ、震災後の記録写真を撮りに浪江に通いながら、現在の生活を送ってられます。

◆今の住まいは、浪江に似た静かな場所
浪江は、いいところでした。住む人の顔がわかり、買い物も便利で、海・山・川・畑・田んぼと自然豊かでした。住んで30年の歴史は宝物です。
震災後、避難して住んでいたのは福島市。その後、どこで新たな暮らしを始めようかと考えていた時、夫の友人から「那須塩原市が静かで便利だ」と勧められ、現在の場所に家を建てました。近くに田んぼや畑・山・川もあり鮎釣りもできます。浪江の室原あたりに似ているかな。土地の人も親切でここに来

◆被災した経験を各地で語る
被災して知人・友人の住まいがバラバラになりストレスが積もったからか、亡くなられた方が多くおられます。原発事故がなければそのまま浪江に住み続けていて…と思うと悲しくて悔しいです。私も那須塩原市に来て、何で縁もゆかりも無いところにと複雑な思いでしたが、一年を過ぎてから落ち着きました。今は、原発事故後の被災地の記録写真を撮りに浪江に通っ

◆おばあちゃんたちの笑顔が励みに
好奇心から始めた趣味の写真撮影は約30年続いています。公民館でのカメラ教室から始まり、公募展に応募して賞をいただいたこともありました。最近では近くの農家のおばあちゃんたちをよく撮影します。はじめに声をかけた時は驚かれますが、今では仲良しになって写真をプレゼントすることも。そうすると「こんな写真撮ってもらったことない！」と喜んでくれます。
これからも多くの人と交流し、震災後の浪江町の記録写真をずっと撮っていきたいと思っています。



高橋 俊正さん(赤宇木)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：1月29日

他所では死にたくない。だから、今、帰るための準備をする

高橋さんは若い頃からものづくりが大好きで、東京で大工さんをされていました。ご両親の介護のために津島に戻り、大工業と農業を兼ねながら、「りんどう」の栽培や畜産業にも挑み、牛を増やしながらか、ようやく軌道に乗った頃に震災に遭いました。

震災後は、牛の世話をするために、避難をした福島市内の弟さんの家から約1か月ほど津島に通ったのですが、7月に牛を手放し、岳温泉「あづま三番館」に避難。その後、二本松市の仮設住宅を経て、現在、二本松市針道で花き栽培をしながら暮らしていらっしゃいます。



▲普段余り聞くことのできない、花き栽培のお話や農業にける心意気をたくさん聞かせていただきました。

◆浪江のまちや人に対する、今のお気持ちはいかがですか
「浪江のこころ通信」を読むと、町のみんなの様子はよく分かるんですよ。だけど、最近、帰還を前提に無理に急いでいるような気がします。農業は？商工業は？浪江町でサラリーマンをしている人たちは？と思うんです。
特に、農業は技術と人手がなくて再興できません。そこが忘れられているような気がします。金銭的な支援として、国や県は耕作地の規模に応じて、あるいは組合などの組織に対していろいろな補助をしているようですが、私は一人ですとことんやってみたくて思っています。
とはいっても、手伝ってくれる人がいなければ仕方がない。町はシルバー人材センターなどを通じて、浪江に戻った高齢の方々が何かできるような仕組み

◆今の暮らししぶりを教えてください
二本松市の仮設住宅にいる時から、この針道に毎日通って、地域の達人に学びながら、花づくりを極めたいと取り組んできました。たまたま、この家に以前住んでいたご夫婦が大玉村に移られたので、越して来ました。というのも、私はずれ浪江に戻ります。その時に、花き市場で高値の取引ができる、より品質の良い「りんどう」などの花を作るために、現場での経験と技術をここで研究していま



▲「夏の間は忙しくて、げそと痩せてしまいましたよ」と、高橋さん。80cm以上に仕上げたりんどうの花束は価値が高いそうです（ご本人から写真提供）。

◆高橋さんのこれからの目標は何でしょうか
出荷時期の異なる10月から寒咲きの「輪菊」や「トルコギキョウ」などを市場向けの商品として作りながら、ミカンやデコボン、レモンなどの柑橘類はどうかとか、「ゴクラクチョウカ」や「デカンフアール」、「ハラカクタ（ジャカラクタ）」などの寒さに弱い花々はどうかなど、日々勉強中です。また、津島では冬場の仕事として、伝統的に菜種やエゴマ、椿、トチの実、アケビなどの油搾りをしてきました。ぜひ復活させたいですね。そのためにも、まとまった耕地が必要ですし、再び牛も飼いながら、繁殖にも力を入れたいです。
あと5年を目途に、帰郷に向けて本腰を入れて準備をしていくつもりです。

す。針道の気候は津島と異なり、夏は暑く、風が抜けない風土ですが、今はハウスと露地栽培の両方を試しながら、流行の色や花の付き方をいろいろ試しています。
メインとなった「りんどう」の出荷は6月半ばから10月頃までですが、そのピークはお盆からお彼岸です。夏の繁忙期は、地域の女性2人にも手伝ってもらいながら、仕事をしています。
◆高橋さんのこれからの目標は何でしょうか
出荷時期の異なる10月から寒咲きの「輪菊」や「トルコギキョウ」などを市場向けの商品として作りながら、ミカンやデコボン、レモンなどの柑橘類はどうかとか、「ゴクラクチョウカ」や「デカンフアール」、「ハラカクタ（ジャカラクタ）」などの寒さに弱い花々はどうかなど、日々勉強中です。また、津島では冬場の仕事として、伝統的に菜種やエゴマ、椿、トチの実、アケビなどの油搾りをしてきました。ぜひ復活させたいですね。そのためにも、まとまった耕地が必要ですし、再び牛も飼いながら、繁殖にも力を入れたいです。
あと5年を目途に、帰郷に向けて本腰を入れて準備をしていくつもりです。



脇坂 明さん(権現堂)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 菊池
浪江町復興支援員 八橋・森・小川
取材日：2月10日

これからは楽しいことをやり続けたい

脇坂さんは、現在水戸で一人暮らしをされていますが、プロの資格を持っている社交ダンスをしたり、カラオケをしたり、自分で作詞してCDを作ったり、舞台上に挑戦したりと、充実した生活を送っていらっしゃいます。



▲脇坂さんが作詞し、歌って作ったCD「あの日を超えて」「天国からの手紙」と、出演した「1万人のゴールドシアター2016」のパンフレット

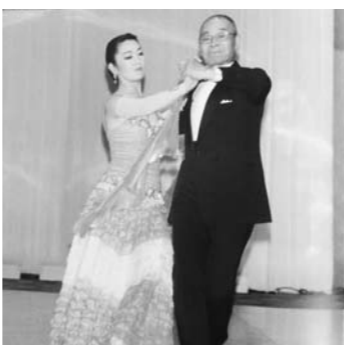
この地震によって原発が爆発し、避難暮らしを余儀なくされたことに対する精神的損害に、交通事象と定額していることが納得する国・県・町・マス

◆妻と一緒に避難所を転々として 3月11日、介護が必要な妻をベッドに寝かせていた時に地震が発生しました。しばらくすると町の防災無線で津波が来るので直ぐに逃げるよう放送があったため、妻を車に乗せて井出に住む娘のところに避難し一晩過ごしました。 次の日には放射能が漏れ原発が危ないとの情報があったため、原町に移動しました。そして、3月12日の原発の爆発によって、更に西に逃げて福島市まで移動し避難所にとどり着きましたが、避難所暮らしは介護が必要で妻と一緒に暮らすのは介護が本当に困りました。 その後、福島県内や茨城県内の親戚宅や知人宅を頼って10か所ぐらい転々と避難し、2年ぐらい前から現在の水戸の借上げアパートに落ち着きました。妻は、息子が経営している介護施設に入居させているため、月に1回2回面会に行きますが、現在はひとり暮らしです。

◆精神的損害に対する補償について 納得することができずに... この地震によって原発が爆発し、避難暮らしを余儀なくされたことに対する精神的損害に、交通事象と定額していることが納得する国・県・町・マス

この地震によって原発が爆発し、避難暮らしを余儀なくされたことに対する精神的損害に、交通事象と定額していることが納得する国・県・町・マス

「あの日を超えて」 作詞 脇坂 明
1 山脈はるか 阿武隈の 青き海原美しく あの日の時 地響きに ゆれ動き 母なる海は 魔の山となり 押し寄せてきた なすすべもなく 父母と 多くの命 多くのくらし うばわれた ああ あの日を超えて 呼べど答えぬ わが故郷へ 一つの日か
2 四季おりおりの 麗しき 恵みゆたかな 山や川 あの日の時 海辺から 風にのり 見えぬ汚れが 魔の手をひろげ 染めつくされた 救いをもとめ 呼ぶ声も 無念の涙 すまいを追われ 散り散りに ああ あの日を超えて 住民はみんな 住むが故郷へ 一つの日か



▲つくば市のオークラフロンティアホテルつくばで開かれたダンスパーティーに、デモンストラクションでダンスを披露



浅野 勇太さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：1月29日

山形に来たときは、ぜひりんご狩りを楽しんでください

理美容店「カットハウスハッピー」の常務取締役を務め、浪江店の店長をしていた浅野さん。現在、山形県白鷹町で家族5人で暮らしながら、妻・祥子さんと朝日町でりんごの農園を営んでいます。3人のお子さんもすくすく成長しており、長男・秦くんと次男・嵐くんはサッカー、長女・凜ちゃんはピアノを頑張っています。3人の冬の楽しみは、近くのスキー場で友達とスキーやそりで遊ぶことと教えてくれました。



▲左から、嵐くん(小4)、凜ちゃん(小1)、勇太さん、秦くん(小6) 妻・祥子さんも一緒に、家族揃ってお話を聞かせてくださいました。

◆子どもたちの生活を考え浪江と環境が似ている白鷹町へ 震災当時は、新店舗を立ち上げる準備のため仙台に単身赴任しており、地震後、家族とまったく連絡が取れず原発のニュースを見てとても不安でした。数日後、電話がやっとつながり、妻の家族と一緒に仙台に避難しました。長男が4月から小学校に入学する予定だったので避難先の小学校に通い始めました。ですが、都会に来てあまりにも環境が変わり馴染めない様子だったので、専門学校の時の同級生を頼り、浪江に雰囲気に近い白鷹町に引っ越してきました。白鷹町は環境がのびのびして

年団に入り、私も経験者なのでコーチを始めました。スポ少を始め、どこに行っても誰かに会った時には声をかけてもらいます。最初の一年は孤独を感じていましたし、他の浪江のお母さん方からはじめの話しも聞き不安でしたが、年上のお兄ちゃんお姉ちゃんたちが随分声をかけてくれ、救われました。知らない土地知らない人の所にきて、子どもながらも不安があったと思いますが、よく頑張ってくれたと思います。逆に、子どもたちが頑張っている姿を見てりんご栽培とスポ少の指導者をしてみようと思えました。

◆りんご農家として新しい挑戦 「カットハウスハッピー」は、浪江駅前であり、低料金の理美容店でした。たくさんのお客様に来ていただいていたこと感謝しています。このころ通信で、お客様の元気な姿や事業を再開した情報を嬉しく見えています。 震災後一年は、宮城県の震災復興の仕事につき週末だけ帰る生活をしていましたが、朝日町のりんごに興味を持ち訪れた農業支援センターで、師匠の阿部為吉さんに出会ったことで、りんごは面白いと思いつきました。耕作放棄地を開墾して畑を作り、苗木を植えて一からスタート。一昨年末で師匠の所で働き教わりながら朝夕で自分の畑の管理をし、昨年からは妻も仕事に加わってもらい、りんご約300本、ラフランス約150本を育てています。日に当てる無袋栽培を行っており、天災や病害虫に弱く手はかかりませんが、甘いりんごができます。もし山形に来たら、皆さんにりんご狩りを楽しんでもらえたらと思っています。

いるし、町の方があたたく、子どもたちは地域に溶け込んでくれています。入学式はすでに終わっていたのですが、特別に長男一人だけの入学式をしていただきました。今年卒業なので、他の子と同じように卒業アルバムに入学式の写真が載ることをありがたく思っています。成人して大人になっても、一生の友達となるよう大切にしたいです。

また、子どもたちがサッカーのスポーツ少年団に入り、私も経験者なのでコーチを始めました。スポ少を始め、どこに行っても誰かに会った時には声をかけてもらいます。最初の一年は孤独を感じていましたし、他の浪江のお母さん方からはじめの話しも聞き不安でしたが、年上のお兄ちゃんお姉ちゃんたちが随分声をかけてくれ、救われました。知らない土地知らない人の所にきて、子どもながらも不安があったと思いますが、よく頑張ってくれたと思います。逆に、子どもたちが頑張っている姿を見てりんご栽培とスポ少の指導者をしてみようと思えました。